
日常の中で

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常の中で

【Nコード】

N9454A

【作者名】

蒼

【あらすじ】

有栖川兄妹が過ごす日々をお送りいたします。

1 一日の始まり(前書き)

稚拙な文ですがノンビリとした兄妹の日々を書いていきたいです。

1 一日の始まり

遠くから目覚ましの音が聞こえる。その音はゆっくりと確かなそれになってゆき、私は目を覚ました。

ぼやけた視界。映るのは当たり前だが自分の部屋で、カーテンから光が零れている。

「朝・・・」

ぼつりと漏らし、改めて朝を迎えた事を確認した。

が、体の方は事実を認めたくないようでもうにも布団から出る気がしない。

ノックの音。

「涼香、起きてるか」

続け様にドア越しの為、少しくぐもった兄さんの声。どうやら、体の方には諦めてもらわなければならぬ様だ。私は抵抗を続ける体に強く命令し上半身を起こした。

「起きてる」

少し小さかったかも知れない。

しかし、私の心配は必要なかった様で兄さんは短く返事してその場を離れていった様だ。

そして鳴り響く電子音。何か違和感があった。

「あ」

気付いて止める。職務に励んでいた目覚ましに謝って私はベッドから降り、小さく欠伸をした。

兄さんが作る味噌汁は決まって同じ味が続くことはない。ある時は味が薄かったり、それを指摘すると次の日に極端に味が濃く、今日も例外ではなかった。

「辛い」

どちらかと言えば薄味が好きな私はそう呟くしかなかった。

「・・・だなあ。」

苦笑いの兄さん。心なしか意気消沈しているように見える。料理の道は厳しい様だ。だからといって不味いわけではない。美味しいのだ、ただ味が濃味なだけであって。

「あ、無理して飲まなくても良いぞ」

そんな事できるわけではない。作る人は食べてもらう為に作っている、それと同じで食べる人は作ってもらっているという事を頭に入れておくべきなのだ。

自分の為に作ってくれている、それだけで嬉しくなるものではないだろうか？

あくまでも持論に過ぎないけれど、私はそう思う。
兄さんの言葉に肯定の素振りをせず、味噌汁に口をつける。

「今度は失敗しないようにするよ」

ほら、また嬉しくなった。何も言わずに食事を続ける私。ぶつぶつと何事か呟きながら味噌汁を飲む兄さん。静かだけど何処か満たされた何時もの朝が在る。

何でもないうただけれども、これが私、有栖川 涼香と兄さん、有栖川 秋夜の朝の風景である。

1 一日の始まり（後書き）

秋「あとがきなんだが・・・作者が居ないな」 涼「兄さん、

メモがある」『この度は、このような駄文を読んで頂き有難うございます。誤字脱字、文法の使い方など、見るに堪えない文章だと思います。その時には存分になじってやってください。作者』

秋「・・・」

涼「・・・M？」

秋「えっ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9454a/>

日常の中で

2010年10月25日18時02分発行